

前部要素の第2モーラに長音を含む複合外来語と短縮語形

著者	文 昶允
雑誌名	筑波日本語研究
巻	23
ページ	183-197
発行年	2019-01-31
URL	http://hdl.handle.net/2241/00154661

前部要素の第2モーラに長音を含む 複合外来語と短縮語形

文 昶允

キーワード：複合語，前部要素，長音，外来語，短縮語，分節要素

要 旨

複合外来語に由来する短縮語形には、語頭から順に2モーラずつを切り取る規則的な語形に加え、第2モーラにある特殊モーラの代わりにその直後の自立モーラを組み込む変則的な語形が存在する。本研究では、変則的な語形の生起に影響する要因を明らかにするため、複合外来語の前部要素に長音を含む語に注目する。加えて、短縮現象に働くと考えられる2つの原則のうち、どちらの原則がより優先的に働くかによって短縮語形が決められることについて考察を進める。

1. はじめに

本研究は、1つの基体に複数の短縮語形が存在する現状に着目しているものである。例えば、「メール・アドレス」¹の場合は、「メルアド」ならびに「メアド」など、複数の短縮語形が出力され得る。本研究では、こうした短縮語形のバリエーションとその生起要因について探究するためには、複合外来語の第2モーラに長音を含む語に注目する必要があることを主張する²。加えて、短縮現象に関する2つの原則のうち、どちらの原則がより優先的に働くかによって短縮語形が決められることについて考察を行う。

本論文の構成は、次の通りである。第2節では、本研究の考察対象である短縮現象について概観する。3.1節では、基体の前部要素に長音を含む複合語の中でも、なぜ

¹ 本論文で使用する「・」表示は、複合語を構成する各要素の境界を示す。

² 本研究では、広義の外来語ではなく、狭義の外来語（洋語）のみを考察対象とする。

他の語種（漢語、和語など）ではなく、外来語に焦点を当てるのか詳述する。3.2 節では、前部要素に長音以外の特殊モーラ（撥音・二重母音の第 2 要素・促音）を含む複合外来語について言及した先行研究を概観する。それらの先行研究の分析結果を踏まえ 3.3 節では、実際に複合語由来の短縮語データベース³を分類した結果を提示し、前部要素に長音を含む複合外来語が他と異なった振る舞いをすることを示す。その後、第 4 節では、短縮語形における音韻特徴について考察を進めつつ、それぞれの語形がどのような動機によって生起するかについて論じる。第 5 節では、本論文の議論をまとめめる。

2. 短縮現象

短縮とは、基体となる語が長い場合に、その一部を削除することによって新しい語を形成する語形成（Itô 1990; 窪田 2002; Labrune 2002 など）である。短縮語は、基体の語構成に応じて大きく 2 種類に区別される。1 つは単純語に由来する短縮語であり、もう 1 つは複合語に由来する短縮語である。本研究では、複合外来語に由来する短縮語の中でも、各構成素の一部を短縮語形として切り取るタイプ (1) を考察対象とする。

(1) デジタル・カメラ → デジカメ

(1) に見るように、複合外来語から作られる短縮語では、多くの場合、基体の各構成素の語頭 2 モーラ分を切り取る形で語が形成される（Itô 1990; 窪田 2002）。ところが、前部要素の第 2 モーラに長音を含む場合は、各構成素の語頭 2 モーラずつを順当に取るタイプ (2a) に加え、第 2 モーラにある長音の代わりにその直後の自立モーラ（それ自身で音節を構成できるモーラ）を組み込むタイプ (2b)、そして第 2 モーラにある長音が残らず、かつ、代わりに組み込まれるものもないタイプ (2c) が存在する。以下、

³ 複合語由来の短縮語データベース（全 1,101 語）は、先行研究の本文と付録資料から複合構造の外来語を基体とする語を抜き出したもの（全 569 語）に加え、本論文の筆者が 2014 年 1 月から 6 月までの間に行ったインタビュー調査と記述式アンケート調査から得られた実在語（全 532 語）からなる。インタビュー調査は対面形式であり、普段の生活で使う、あるいは聞いたことのある短縮語（2 つの外来語からなるもの）とその原形について尋ね、筆者がメモを取る形でデータを収集した。インタビュー調査は、主に 50 代（10 人ほど）が対象となっている。一方、記述式アンケート調査は主に大学生（50 人ほど）を対象としており、インタビュー調査と同じく、回答者が普段の生活で使う、あるいは聞いたことのある短縮語（2 つの外来語からなるもの）とその原形を、できるだけ多く書いてもらった。

本研究では (2a) のタイプを「保持形」、(2b) のタイプを「補完形」、(2c) のタイプを「脱落形」と呼ぶ。

(2) 前部要素の第2モーラに長音を含む複合外来語由来の短縮語

- a. シャープ・ペンシル → シャーペン（保持形）
- b. パーソナル・コンピューター → パソコン（補完形）
- c. メール・アドレス → メアド（脱落形）

(2) の例は、第2モーラに長音を含む点で共通している。まず、(2a) の保持形は各構成素の語頭から順当に2モーラずつ切り取ることから、(1) に示した規則的タイプ「デジタル・カメラ → デジカメ」と質的な違いはない。それに対して (2b) の補完形は、‘各構成素から2モーラずつ’ という規則には従うが、‘語頭から順当’ という規則には従わないことから、変則的なタイプとして分類することができる。また、(2c) の脱落形も‘語頭から順当’ という規則には従うものの、‘各構成素から2モーラずつ’ という規則に従っていないことから、変則的なタイプとして分類することができる。

以上を踏まえ第3節では、複合語由来の短縮語データベースの分類結果を基に、(2b)(2c) のような変則的語形の観察には、複合外来語の第2モーラに長音を含む語が考察対象として最も適していることを示す。

3. 前部要素の第2モーラに長音を含む複合外来語

3.1 複合外来語に由来する短縮語

まず、本研究で複合語由来の短縮語を考察対象とする理由は、短縮語の形成方法と関係している。(3) に単純外来語由来の短縮語に加え、複合外来語由来の短縮語の例を示す。

(3) a. 単純外来語由来の短縮語

イラストレーション → イラスト

b. 複合外来語由来の短縮語

シャープ・ペンシル → シャーペン（保持形）

*シャプペン（補完形）

(3a) 単純語の場合は、基体の左端から一定の範囲までを切り取ることで短縮語が形成される。一方で、(3b) 複合語の場合は、各構成素から切り取ったものを結合することによって語が形成される。その上で、短縮の結果出来上がる語形の内部に同一の分節音が連続してしまう場合には、補完形の出力が明らかに避けられる (*シャブペン) ことが分かる。同一の言語特徴が並んで出現する語形が避けられやすいという性質は、理論的に OCP (Obligatory Contour Principle, OCP) 制約として現れると考えられている (Leben 1973; Goldsmith 1976; McCarthy 1986)。こうした OCP 制約は、基体の一部を結合する過程を伴う場合に働く。そのため、(3a) 単純語の場合は、基体の左端からどの範囲までを切り取るかで語形成が済み、OCP 制約はかかわらない。しかしながら、(3b) 複合語の場合は、各構成素から切り取った語形の結合という操作が求められるため、OCP 制約による短縮語形の制御が生じ得る (シャブ+ペン)。従って、短縮語形成における OCP 制約の影響について検討するには、複合語に由来する短縮語が考察対象としてより適していると考えられる。

しかしながら、複合語由来の短縮語は、特定の語種を基体として生成されることに限られるわけではない。そうした中で本研究が考察対象を外来語の基体に限定するのは、次のような理由によるものである。日本語における語種は、和語 (Native words)、漢語 (Sino-Japanese)、外来語 (Foreign) と区別される (McCawley 1968; Vance 1987; Itô and Mester 1995 など)。本研究が注目する特殊モーラである長音は全ての語種に現れるものの、その出現頻度は必ずしも均等ではない。各語種における特殊モーラの出現頻度について調査した先行研究 (松崎 1994: 78) によれば、長音は漢語に最も多く現れ、和語には極めて少ないという⁴。長音の出現頻度について松崎 (1994) が示しているデータの内訳を見ると、漢語では 16.24% (10,017 / 61,684)、和語では 1.52% (767 / 50,429)、そして外来語では 11.12% (525 / 4722) となっている (それぞれの割合は、長音の数 / 当該全拍数を算出したものである)。つまり、長音の出現頻度は、「漢語 > 外来語 > 和語」の順に多いとされている。このデータを見ると、長音を含む複合語に由来する短縮語の全体像を把握するには、構成素が漢語や外来語である方が適しているように思える。

⁴ 本研究で基体に和語を含む語を考察対象から外すもう 1 つの理由は、次の通りである。複合語由来の短縮語データベース (1,101 語) において、構成素の片方が和語である実例は 63 語である。しかし、和語から生起する変則的タイプ (補完形あるいは脱落形) は全く見あたらず、必ず語頭 2 モーラを切り取ることで短縮語が形成されている。和語において変則的タイプの観察が難しいという特徴は漢語と共通しており、このような理由から漢語とともに本研究の考察対象から除外する。

しかし、長音の出現頻度が最も高いという理由で、漢語を本研究の考察範囲に入れてしまうと、(4b)のような例が問題となってくる。

- (4) a. ワーキング・ホリデー → ワーホリ（保持形）
 a'. パーソナル・コンピューター → パソコン（補完形）
 b. 合同（ゴードー）・コンパ → ゴーコン（保持形）
 *ゴドコン（補完形）

(4) は、いずれも前部要素の第2モーラが長音であるという点では共通するが、(4a) (4a') は前部要素と後部要素がともに外来語である一方で、(4b) は前部要素のみが漢語である。(4a) (4a') のように基体が外来語であると、構成素の語頭から順当に2モーラを取る保持形（例：ワーホリ）に加え、(4a') のように前部要素の長音を取る代わりに、直後の自立モーラを組み込む補完形（例：パソコン）の2つのパターンが出力できる。それに対して、(4b) のように基体が漢語である場合は、短縮の切れ目が漢字表記（文字）と一致するため、(4b) における前部要素「合同」からは、「合」という1文字が短縮語形に残る。従って、第2モーラにある長音を短縮語に組み込まないタイプ、つまり補完形として短縮されることは起こりにくく（*ゴドコン）、短縮パターンがある程度予測できてしまう。以上のことから、本研究では、基体に漢語が混在する例を除き、外来語のみで形成されている複合語を考察対象とする。

3.2 特殊モーラに分節構造と短縮語形

本研究が種々の特殊モーラのうち、とりわけ前部要素の長音を考察対象とする理由は次の通りである。日本語の特殊モーラには、促音 (Q)、撥音 (N)、長音 (R)、二重母音の第2要素 (J)（以下、二重母音）の4種類があるが、これらの特殊モーラは、自立モーラに連続して重音節を成すという共通点を有する。

本研究の考察対象である複合語由来の短縮語は、基体の一部を切り取ることが特徴的であり、その切り取り方によって短縮語形が定められる。複合語由来の短縮語においては、各構成素の語頭から順に2モーラずつを切り取るパターンが規則的タイプである。この短縮パターンは、前部要素の第2モーラが自立モーラである場合（例：デジタル・カメラ→デジカメ）のみならず、特殊モーラである場合(5)においても同様に観察される。

(5)	促音(Q)	<u>ニ</u> ッケル・ <u>カ</u> ドミウム	→	ニッカド
	撥音(N)	コン <u>サ</u> ート・ <u>マ</u> スター	→	コンマス
	長音(R)	<u>ワー</u> キング・ <u>ホリ</u> デー	→	ワーホリ
	二重母音(J)	<u>アイ</u> ドル・ <u>マ</u> スター	→	アイマス

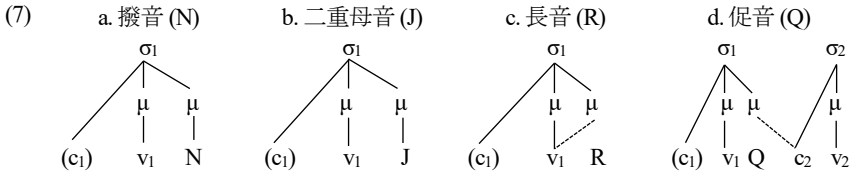
(5) は、いずれも前部要素の第 2 モーラに特殊モーラを含む複合語とその短縮語の実例である。(5) における短縮パターンは、各構成要素の語頭から順当に 2 モーラずつを切り取るということから、基体が軽音節からなる場合の短縮パターン（例：デジカメ）と変わりがない。しかしながら、前部要素の第 2 モーラに特殊モーラを含む複合語の場合においては、(5) に示した規則的タイプに加え、(6) に示す変則的タイプの実例も観察される。

(6)	促音(Q)	<u>ラ</u> ッキー・ <u>ス</u> トライク	→	ラキスト
	撥音(N)	実例無し		
	長音(R)	<u>パー</u> ソナル・ <u>コン</u> ピューター	→	パソコン
	二重母音(J)	<u>ドイ</u> ツ・ <u>レ</u> クイエム	→	ドツレク

(6) は、いずれも前部要素の第 2 モーラに特殊モーラを含むという点では (5) と同様である。しかしながら、前部要素におけるモーラの切り取り方から見ると、両者は明らかな相違を示す。つまり (5) は、基体の語頭から順当に 2 モーラずつを切り取るという規則に従っている（保持形）のに対して、(6) は、語頭から数えて 2 番目にある特殊モーラを切り取るのではなく、代わりにその直後の自立モーラを組み込んでいる（補完形）のである。

保持形と補完形の語形成において最も目立つ違いは、基体におけるモーラの組み込み方にある。(5) のように、語頭から順当に 2 モーラずつを切り取るという規則に従うタイプは、特殊モーラの種類やその有無とは無関係に現れる。しかし、(6) に示した補完形は、前部要素の第 2 モーラに特殊モーラを含む場合、つまり第 1 音節が重音節である場合のみに観察される。さらに言うと、前部要素の第一音節が重音節である複合語が補完形に短縮される可能性は、その重音節を構成する特殊モーラの種類によって異なる。

特殊モーラは、いずれも単独では音節を形成することができず、語頭に現れないという性質を持つ。さらには、アクセント核を担わないなどの理由から、主に自立モーラに対する副次的音韻要素として扱われる。しかしながら、日本語における4種類の特殊モーラが必ずしも一律な音韻的性質を持つとは限らない。(7)は、それぞれの特殊モーラを持つ分節構造を示したものである。



(7a) 撥音 (N) と (7b) 二重母音 (J) は、いずれも重音節内に固有の分節を持つという特徴がある。これに対して、(7c) 長音 (R) と (7d) 促音 (Q) は、「独自の分節を持たず、隣接する母音ないしは子音からのいわば『借り物』の分節によって」（那須 2005: 15）モーラの節点を満たされるということから分節構造上の親近性を有する。本研究は、「パーソナル・コンピューター」、「メール・アドレス」のように、特殊モーラを含む語から作られる「パソコン」、「メアド」のような変則的タイプ（補完形、脱落形）に注目するものであるが、これらの語形は、基体の重音節 (CVX) において、自立モーラ (CV) と特殊モーラ (X) が切り離されることによって形成される。先行する自立モーラと分離しやすいか否かは、特殊モーラの構造の違い、すなわち、特殊モーラが音節内で分節を持つか否かと関係する。具体的に、どのような特殊モーラを含む場合に、変則的タイプが生じやすいかということについて考察するためには、実例などのデータを大量に集めた上での分析が必要である。本節の内容を踏まえた上で、次節では、本研究における複合語由来の短縮語データベースの分類結果に基づき、(7) に示されている特殊モーラの音韻的特徴によって変則的語形の生起率が異なっていることについて考察する。

3.3 複合語由来の短縮語データベースの分類結果

【表 1】は、複合語由来の短縮語データベースを基に、前部要素の第2モーラに特殊モーラを含む実例の数とその短縮語形（保持形、補完形、脱落形）の数を示したものである。

【表 1】特殊モーラを含む語の短縮語形（前部要素の第 2 モーラ）

	実例数	保持形	補完形	脱落形
撥音 (N)	144 語	144 (100%)	0 (0%)	0 (0%)
二重母音 (J)	82 語	73 (89.0%)	6 (7.3%)	3 (3.7%)
長音 (R)	123 語	78 (63.4%)	42 (34.2%)	3 (2.4%)
促音 (Q)	26 語	11 (42.3%)	11 (42.3%)	4 (15.4%)

【表 1】からうかがえるのは、複合語の前部要素に含まれている撥音 (N) は、例外なく保持されており（例：モンスター・ストライク → モンスト）、二重母音 (J) も 89.0%という高い割合で保持形になっている⁵ことである（例：アイドル・マスター → アイマス）。このような分布は、特殊モーラにおける分節構造と関連している。撥音 (N) と二重母音 (J) は、音節内にそれ自身のモーラに対応する分節を有する特殊モーラである。那須 (2009) が指摘しているように、独自の分節を持つ特殊モーラ（すなわち、撥音 (N) と二重母音 (J) が短縮語において脱落すると、単にモーラが失われるのみならず、特殊モーラが持つ分節要素が削除されることになる。一方で、独自の分節を持たない特殊モーラである長音 (R) と促音 (Q) の場合は、撥音 (N) と二重母音 (J) に比べ保持形の割合は低く（長音は 63.4%、促音は 42.3%）、補完形の割合が高くなっている（長音は 34.2%、促音は 42.3%）。この結果をまとめると、保持形として短縮される割合は「撥音 (N) > 二重母音 (J) > 長音 (R) > 促音 (Q)」の順に高い一方で、補完形になる割合はこの順で低いことが分かる。

このような短縮語形の分布は、特殊モーラの安定度における尺度と相関している。特殊モーラの安定度⁶とは、「音連続として、あるいは音節を構成するまとまりとして、

⁵ 一方で、撥音 (N) と二重母音 (J) における補完形と脱落形の割合は、いずれも 10%未満でかなり低い。このうち、二重母音において補完形が変則的であるということは、Kubozono (2001) によって既に指摘されている。

⁶ 日本語（東京方言）では、特殊モーラの内部における違いに注目した 2 つの見解がある。1 つは、特殊モーラ間の相対的な「自立性」の差に、もう 1 つは音節内における「安定度」の差に着目したものである。まず、自立性については、歌謡における音符の付与パターン（音節の分節方略）の分析を通じて、「J > R > N > Q」の順で高い階層が示唆されている (Vance 1987; 窪田 1992, 1999; 田中 2008)。この階層は、母音性を持つ特殊モーラ (J > R) と子音性を持つ特殊モーラ (N > Q) との間に線引きができる。一方で、安定度とは、音節のひとまとまりとしてどの程度安定しているかによって、「N > J > R > Q」の階層を成すことが知られている (窪田 1999; 那須 2009)。本研究では重音節を構成する 4 種類の特殊モーラの間には、音節のひとまとまりとしての安定度による差が存在し、その差により補完形の出現率の差異が生み出されていると想定す

どの程度安定したものであるかという尺度」（窪菌 1999: 250）であり、「固有の分節を有しているか否かといった構造的な観点」（那須 2009: 61）から決まるとされる。(8)は、音節内における特殊モーラの安定度を示したものである。

- (8) 特殊モーラの安定度
 (高い) N > J > R > Q (低い)

特殊モーラの安定度は、特殊モーラが音節内でどの程度安定した振る舞いをするか、すなわち、各特殊モーラが音節内で対応する分節を持つか否かに基づく。安定度が高い特殊モーラ（撥音 (N)、二重母音(J)）は、音節内での「存在感」（那須 2009: 59）が強く、短縮語内に保持される語形（保持形）が生起しやすい。一方で、安定度が低い特殊モーラ（長音 (R)、促音(Q)）は、音節内での存在感がそれほど強くないため、それらを含む複合語由来の短縮語は、短縮語内に保持されない語形（補完形、脱落形）が生起しやすくなる。(8)に示した安定度における尺度が複合外来語由来の短縮語における変則的タイプ⁷の生起にも影響するということについては、次のように述べられている。那須 (2009)によると、安定度の高いグループ、つまり撥音 (N) と二重母音 (J) が短縮語形において脱落することはごく稀である一方で、安定度の低いグループ、つまり長音 (R) と促音 (Q) は、複合外来語由来の短縮語において削除されやすいとされている。那須 (2009) は、二重母音 (J) が第2要素にくるとき、変則的タイプ（例：ボイス・トレーナー→ポトレ、マウンテン・パーカ→マンパ）は22.7%（44語中10語）の割合でしか現れず、安定度が最も高いとされる撥音 (N) では全くみられないと指摘している。一方で、安定度の低いグループ（長音 (R) と促音 (Q)）の場合、長音 (R) が第2要素にくると変則的タイプは52.1%の割合（121語中63語）（例：メール・アドレス→メアド、フリー・マーケット→フリマ）であり、促音 (Q) が第2要素にくると変則的タイプ（例：ホット・スパ→ホスパ、ポスト・ペット→ポスペ）は83.3%の割合（42語中35語）を占めていると述べられている。以上のことから分かるのは、短縮語形における変則的タイプの生起に、特殊モーラが持つ音節内での安定

る。特殊モーラの安定度については、「R>Q>N>J」の順で高い階層を成すと主張する見解もあるが（松崎 1996）、本研究では、複合語由来の短縮語データベースの分類結果と一致する階層である「N>J>R>Q」を分析の尺度として採用することとする。

⁷ここで言う変則的タイプとは、「2モーラ+1モーラ」あるいは「1モーラ+2モーラ」からなる語形である。このような短縮パターンは、撥音と二重母音の場合より、長音と促音において圧倒的に多く現れる。このことについては、窪菌 (2002) によっても指摘されている。

度が関与するということである。本研究におけるデータベースの分類結果からは、「N < J < R < Q」の順で変則的タイプ（補完形，脱落形）の生起が多いことが分かった。このことは，特殊モーラにおける安定度の階層「N > J > R > Q」（窪菌 1999; 那須 2009）と正反対の結果である。

続いて，特殊モーラが後部要素の第 2 モーラにある場合における複合語由来の短縮語データベースの分類結果は，【表 2】の通りである。

【表 2】特殊モーラを含む語の短縮語形（後部要素の第 2 モーラ）

	実例数	保持形	補完形	脱落形
撥音 (N)	235 語	230 (97.9%)	0 (0%)	5 (2.1%)
二重母音 (J)	48 語	30 (62.5%)	10 (20.8%)	8 (16.7%)
長音 (R)	119 語	44 (37.0%)	12 (10.1%)	63 (52.9%)
促音 (Q)	53 語	0 (0%)	10 (18.9%)	43 (81.1%)

【表 2】を見ると，後部要素においても安定度が高いグループに属する撥音 (N) の場合は 97.9%（例：ポケット・モンスター → ポケモン），二重母音 (J) の場合は 62.5%（例：プラス・マイナス → プラマイ）という高い割合で保持されやすい傾向が見受けられる。それに対して安定度の低いグループに属する長音 (R) と促音 (Q) の場合においては，変則的タイプ（補完形，脱落形）の割合が高い。【表 2】において，保持形と補完形の割合の傾向は，【表 1】と同様の傾向を示している。しかしながら，後部要素の第 2 モーラが長音 (R) や促音 (Q) である場合においては，脱落形の割合が非常に高いことが見受けられる。

この現象は，日本語の語末環境に関する制約に起因する。後部要素の第 2 モーラにある長音 (R) と促音 (Q) は，短縮されるといっても語末という音環境に置かれることになる。まず，長音が語末に置かれる場合は，短母音との対立が中和される（例：スケート・ボード → スケボー ~ スケボ）。語末環境における長音が短母音化しやすいという傾向⁸については，窪菌 (2000)，Labrune (2002)，薛 (2012) による記述的研究に加え，音声学的な知見（助川・前川・上原 1999）に基づいた説明が与えられている。このうち Labrune (2002) は，単純語を基体とする短縮語形の分析において，*H#（“The output must not end in a heavy syllable”）(Labrune 2002: 9) という制約を提案し，短

⁸ 語末長音の短母音化については，柴田 (1995) によってもその傾向が言及されている。

短縮語形の語末には重音節が生起しにくいことを指摘している。つまり、語末長音の脱落形の割合が高くなるのは、短縮語形において語末に重音節が生起することを避けた結果であると推察される⁹。

次に、促音において、そもそも日本語には語末に促音がくすることを禁止する音素配列的制約（Itô 1986: 26）がある（例：ポテト・チップス → ポテチ、*ポテチッ）。後部要素の第2モーラが促音である場合に脱落形となる割合が高いのは、この制約への抵触を避けるためである。以上のことから、変則的タイプの生起を分析する本研究には、前部要素の第2モーラに長音を含む語が考察対象として適していると言える。

4. 短縮現象に関する2つの原則

第3節に示した複合語由来の短縮語データベースの分類結果により、前部要素の第2モーラにある特殊モーラの種類に関係なく保持形が多く現れる傾向にあること、また、長音のように安定度が低い特殊モーラにおいては、変則的タイプの生起率が高くなる傾向が明らかになっている。ここで、なぜ1つの基体に保持形と補完形のような短縮語形のバリエーションが存在し得るのかという疑問が生じる。この問題を解消するためには、まず短縮現象はどのような性格を持つ現象であるか考えておく必要がある。

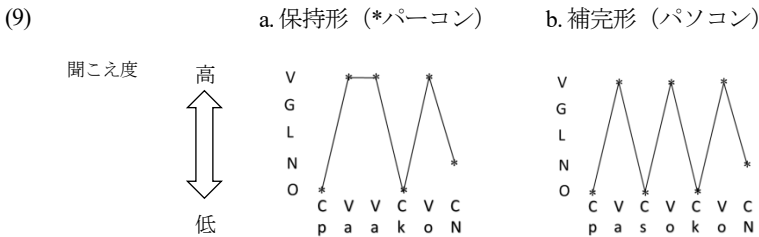
短縮現象に関わる重要な原則としては、次の2つが挙げられる。1つ目の原則は、出力される語を入力される語より短くすることである。この原則は、短くすることによる「省エネ」（窪菌 2002: 95）効果を狙ったものである。本研究における保持形は、この1つ目の原則が優先された語形である¹⁰。次に、2つ目の原則は、短縮される前の語の意味を復元できる要素を多く残すことである。短縮現象には、『元の単語が容易に復元できること』という条件」（窪菌 2002: 95）が求められる。この原則には、短縮される前の語の意味を復元するために必要な語形情報を多く残すという動機が働

⁹ 外来語の語末長音については、表記上のゆれ（小椋 2017）が問題となることもある。しかし、本研究のデータベースにおいて、短縮語として語末長音に表記のゆれがある実例は5例（アイス・コーヒー → アイコー～アイコ、スケート・ボード → スケボー～スケボ、ネット・ゲーム → ネットゲー～ネットゲ、バスケット・シューズ → バッシュー～バッシュ、マリオ・カート → マリカー～マリカ）しか見られなかった。従って表記のゆれは、今回の分析にほぼ影響していないと判断する。

¹⁰ ただし、短縮された語形が短ければ短いほどいいということを意味するわけではない（窪菌 2002, 2010）。なぜなら、1モーラの長さを持つ語形は、日本語における韻律最小性（prosodic minimality）を満たさないためである（Itô 1990）。

いている。本研究における補完形は、この2つ目の原則が優先された語形である。一見矛盾しているように思われるこれらの2つの原則は、短縮語形成における重要な前提となる。

以上を踏まえ、次はそれぞれの短縮語形における音韻の特徴について見る。那須(2005)は、「知覚上の手がかりの差」(那須 2005: 18)を取りあげ、保持形と補完形の特徴を比較している。ここで言う知覚上の手がかりは、分節音を持つ聞こえ度 (sonority) の差によって生じると考えられている(9)¹¹。

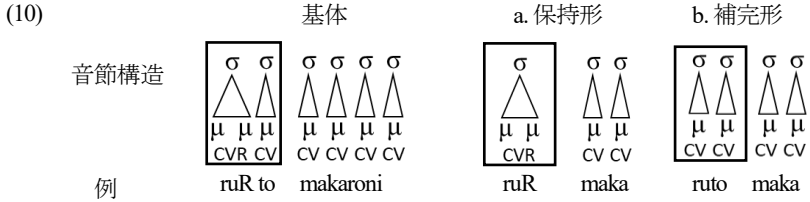


聞こえ度とは、分節音が物理的にどの程度まで聞こえるかという概念である。分節音は、概ね「母音 (Vowel) > 半母音 (Glide) > 流音 (Liquid) > 鼻音 (Nasal) > 阻害音 (Obstruent)」の順で聞こえの階層 (sonority hierarchy) を成していることが知られている (Selkirk 1984: 112)¹²。(9a) 保持形 (*パーコン) の場合、長音は先行する母音の音色を維持するため、聞こえ度が平らに続く構造を持つ (CVVCVC)。一方で (9b) 補完形 (例: パソコン) の場合は、2音節目に子音が置かれることで、先行する母音 (1音節目の母音) との間に聞こえ度の差が生じる (CVCVCVC)。つまり、保持形より補完形の方が知覚上の手がかりが多く存在するのである。

保持形と補完形とでは、それぞれ音節構造も異なっている。(10) に基体の前部要素の長さが2音節3モーラである語 (無意味語) の音節構造に加え、出力形として予測される保持形と補完形の音節構造を示す。なお、(10) の例示における大文字 R は長音を意味し、小文字は基体における分節要素を意味する。

¹¹ (9) は、那須 (2005: 18) の分析に準じたものである。那須 (2005: 18) は、後部要素の第2モーラに長音を含む複合語「ミニ・モーニング (娘) → *ミニモー (保持形), ミニモニ (補完形)」を分析の対象としているが、ここでは本研究の目的に照らし、前部要素の第2モーラに長音を含む複合外来語を例として示す。

¹² Selkirk (1984: 112) における聞こえ度の階層は「a>e, o>i, u>j, w>r>l>m, n>s>v, z, ð>f, θ>b, d, g>p, t, k」と、より詳細に分類されている。



入力される語（基体）における短縮語形（例：ルート・マカロニ）には，(10a) 保持形（例：ルーマカ）および(10b) 補完形（例：ルトマカ）のようなバリエーションがあり得る。(10a) 保持形（例：ルーマカ）は，長音を含む基体の第1音節(CVR)のみが短縮語形として出力され，語全体的には「2モーラ+2モーラ」からなる二項フット(bimoraic foot)構造を保つ。また，(10b) 補完形（例：ルトマカ）においても二項フット(bimoraic foot)構造が満たされており，その点で(10a)(10b)は共通している。

ところで，(10a) 保持形（例：ルーマカ）と(10b) 補完形（例：ルトマカ）を音節数(10)のうち，四角で囲んだ部分)で比較すると，(10a) 保持形は1音節，(10b) 補完形は2音節で異なっていることが分かる。(10b) 補完形（例：ルトマカ）は，基体から2音節(CVRCV → CVCV)を残す(ruto)一方で，(10a) 保持形（例：ルーマカ）は，長音を含む1音節(CVRCV → CVR)のみを残す(ruR)。長音は分節要素を持たないため，(10b) 補完形（例：ルトマカ）における分節要素は(10a) 保持形（例：ルーマカ）より1つ多いことになる。短縮語形における上記のような違いは，短縮語形としてなぜ保持形のみならず補完形のような変則的タイプの出力を許容するのかという疑問に対して答えを与える大きなヒントとなる。それは，(10)の例から見たように，保持形か補完形のような2つの短縮形が存在するのは，それぞれ異なる動機が優先的に働いていることに起因している。つまり，(10a) 保持形は，残す分節要素を少なくすることによって基体をより短くするという動機が優先される語形である一方で，(10b) 補完形は，基体の分節要素を多く残すことによって原形の復元を容易にするという動機が優先される語形であると言える。

5. おわりに

本論文では，複合外来語の前部要素に長音を含む語を分析の対象とする理由について論じた。複合外来語の第2モーラに長音を含む語が変則的な短縮語形の観察に最も

適していると想定する理由は、次のようにまとめられる。

第一に、補完形は、安定度の低い特殊モーラ（長音）を前部要素に含む基体において多く生じるためである。第二に、外来語を考察対象とする理由は、変則的タイプの観察に適しているからである。漢語に由来する短縮語の場合は、文字をベースとして形成されるという特徴があるため、短縮パターンがある程度予測できてしまい、本研究の目的にそぐわないことを指摘した。

さらに、保持形と補完形の特徴に関する議論を行った。保持形の場合、独自の分節を持たない長音が出力形に組み込まれるため、元の語より分節要素の数は少なくなる。一方で、補完形は、第2モーラにある長音の代わりに直後の自立モーラが組み込まれるため、保持形に比べ基体の分節要素の数を多く残すことになる。1つの基体において複数の短縮語形が存在し得るという事実から、短縮現象において指向される方略は、単に入力される語を短くすることではないことが明らかになった。

付記 本稿は、JSPS 科研費 17J00611 による助成を受けた研究成果の一部をまとめたものである。

参考文献

Goldsmith, John (1976) *Autosegmental Phonology*. PhD dissertation, MIT. [Garland, 1979].

Itô, Junko (1990) Prosodic Minimality in Japanese. *Proceedings of Chicago Linguistic Society* 26(2): 213-239.

Itô, Junko and Armin Mester (1986) The Phonology of Voicing in Japanese: Theoretical Consequences for Morphological Accessibility. *Linguistic Inquiry* 17(1): 49-73.

Itô, Junko and Armin Mester (1995) Japanese Phonology. In Goldsmith, J. (ed.), *The Handbook of Phonological Theory*. 817-838. Oxford: Blackwell.

窪菌晴夫 (1992) 「日本語のモーラ：その役割と特性」『日本語のモーラと音節構造に関する総合的研究 (1)』(文部省科学研究費重点領域研究「日本語音声」E10 班研究成果報告書) 48-61.

窪菌晴夫 (1999) 「歌謡におけるモーラと音節」音声文法研究会 (編)『文法と音声Ⅱ』241-260. 東京：くろしお出版.

窪菌晴夫 (2000) 「日本語の語彙と音節構造—「女王」は「じょおう」か「じょうおう」か—」『日本語研究』20: 1-18.

Kubozono, Haruo (2001) On the Markedness of Diphthongs. *Kobe Papers in Linguistics* 3: 60-73.

窪菌晴夫 (2002) 『新語はこうして作られる』東京：岩波書店.

- 窪菌晴夫（2010）「語形成と音韻構造—短縮語形成のメカニズム—」『国語研プロジェクトレビュー』3: 17–34.
- Labrune, Laurence (2002) The Prosodic Structure of Simple Abbreviated Loanwords in Japanese: A Constraint-based Account. *Onsei Kenkyu* 6(1): 98–120.
- Leben, William R. (1973) *Suprasegmental Phonology*. PhD dissertation, MIT.
- 松崎寛（1994）「和語・漢語・外来語の語形と特殊拍の音配列上の制約—『分類語彙表』3万1千語を対象として—」『東北大学文学部日本語学科論集』4: 75–86.
- 松崎寛（1996）「日本人の「音節」と「拍」の知覚—外来語聴取実験を通じて—」『東北大学文学部日本語学科論集』6: 81–92.
- McCarthy, John J. (1986) OCP Effects: Gemination and Antigemination. *Linguistic Inquiry* 17(2): 207–263.
- McCawley, James D. (1968) *The Phonological Component of a Grammar of Japanese*. The Hague: Mouton.
- 那須昭夫（2005）「複合外来語の短縮に見る特殊モーラの非対称性」『日本語・日本文化研究』15: 9–21.
- 那須昭夫（2009）「特殊モーラの分節構造と安定度」『文藝言語研究. 言語篇』56: 53–71.
- 小椋秀樹（2017）「書き言葉と話し言葉における外来語語末長音のゆれ」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』2: 223–232.
- Selkirk, Elisabeth O. (1984) On the Major Class Features and Syllable Theory. In Aronoff, M. and Oehle, R. (ed.) *Language Sound Structure*, 107–136. Cambridge, MA: MIT Press.
- 柴田武（1995）『日本語はおもしろい』東京：岩波書店.
- 助川泰彦・前川喜久雄・上原聡（1999）「日本語長母音の短母音化現象をめぐる諸要因の実験音声学的研究と音声教育への示唆」アラム佐々木幸子（編）『言語学と日本語教育 実用的言語理論の構築を目指して』81–94. 東京：くろしお出版.
- 田中真一（2008）『リズム・アクセントの「ゆれ」と音韻・形態構造』東京：くろしお出版.
- Vance, Timothy J. (1987) *An Introduction to Japanese Phonology*. Albany: State University of New York Press.
- 薛晋陽（2012）「日本語における外来語語末長母音の短母音化」『音韻研究』15: 51–58.